

同志社大学

2015年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2016年 3月 14日提出

所 属	職 名	氏 名
心理学部	助教	菊谷まり子
研 究 題 目	感情認知における顔の表情と声の相互関係と文化の影響	
研 究 成 果 の 概 要	<p>本研究は、人が言語で感情表出をしたときに声の質（または顔表情）で表す感情と、話している事柄の内容が表す感情が一致しない場合、どちらの情報が重要視されるのかを調べる目的で行っている。</p> <p>研究の第一歩として、まず特定の感情と結びつく状況（例えば悲しみ感情と親族の死）の関係は文化普遍的なのかどうかを調べるため、日本、アメリカ、イギリス、カンボジアの4か国においてネットを使った質問紙調査を行った。その成果は2016年1月に以下国際学会で発表され、</p> <p><u>Kikutani, M., Ikemoto, M., Russell, J. and Roberson, D. (2016). Cultural influence on structure of emotion: an investigation on emotional situations described by individuals from Cambodia, Japan, UK and US. <i>Asia-Pacific Conference on Education, Society and Psychology, Seoul, Korea</i> 査読有</u></p> <p>また同タイトルで <i>International Journal of Applied Psychology</i>, 6 (査読有) に3月中旬に掲載される。</p> <p>2015年度の春に日本人と英語話者およびカンボジア話者数人ずつに発話内容と感情が一致しない音声刺激を提供してもらい（怒った声で「うれしい」というなど）、8月にそれを使った実験をおこなった。結果は、全体的に音声の表す感情のほうが内容よりも重要視されるものの、内容の影響は言語の熟達度が高いほど大きくなった。しかし悲しみの感情に関してはたとえ母国語でも発話内容はほとんど無視され、声質の表す感情をもとに人物の感情が読み取られていた。この研究は論文投稿準備中で、来年度7月に行われる国際学会 <i>International Congress of Psychology</i> で発表予定である（査読済み）。</p> <p>2016年度は同様の研究をアメリカとスウェーデンで行い、全体的に声質を重視する傾向や、悲しみ感情では発話内容を著しく無視する傾向は日本人独特の行動なのかどうかを検証していく予定である。</p>	